

Beja

について



ページャ

現在のページャ（Beja）のある地域は近代史の始め以降、占領下にありました。しかし、ページャの初期の発展に最も大きく貢献したのは古代ローマ帝国です。紀元前1世紀にローマ帝国のジュリアス・シーザーがかつてこの地を支配していたルジタニア人と平和条約を締結したのはまさにこの地です。以降、この地はパックス・ユリア（Pax Julia）と呼ばれ、この地域の法律上・行政上の首都になりました。

現代のページャは、町の配置などに古代ローマ時代の名残をとどめており、エヴォラ（Évora）やメルトーラ（Mértola）へ続く通路はローマ時代の当初の城壁の門があった場所にあります。経済発展の水準は、考古学的遺跡の発掘の範囲と規模によって判断することができます。遺跡の多くはレオノーラ王妃博物館（Museu Regional Rainha D. Leono）に収蔵されています。ページャのすぐ近くに当時のローマ人家族の実際の暮らしぶりを展示したヴィラ・ロマナ・デ・ピゾエス（Villa Romana de Pisões）があります。

6世紀には西ゴート族がこの領地を占領し、8世紀にイベリア半島南部に侵攻したムーア人に敗北するまでその支配が続きました。この町を宗教の中心地とした西ゴート族の文化についてさらに詳しく知るために、サント・アマロ教会（Igreja de Santo Amaro）にある地方博物館の西ゴートの展示を訪れることを強くお勧めします。

12世紀とキリスト教徒によるレコンキスタの間、ページャは戦国時代を経験しました。まず、1162年にキリスト教徒軍に占領され、その後はムーア人の度重なる逆襲が続き、1253年、アフォンソ3世（D. Afonso III）の時代ようやく平和が訪れました。アフォンソ3世はその後、町を再建して国王の憲章を授与し（1254年）、町は再び経済的な重要性を取り戻しました。この世紀の終わりに、ディニス王（D. Dinis）は城の建設を命じ、城の塔（Torre de Menagem）が町の特徴的な名所となりました。

ページャは、アフォンソ5世（D. Afonso V）がページャ公爵領を築き、その称号を弟のフェルナンド王子に与えた15世紀を通して繁栄の時代を謳歌しました。ジョアン2世（D. João II）は、後にマヌエル1世（D. Manuel I）となる従兄弟に公爵領を譲りました。以降、この公爵領は常に国王の次男の所有地となりました。こうした国王の庇護の名残はいくつかの記念建造物に残っています。ノッサ・セニョーラ・ダ・コンセイサン修道院（Convento de Nossa Senhora da Conceição）、ミゼルコルディア教会（Igreja da Misericórdia）、現在はPousada [ポザーダ]のサン・フランシスコ修道院（Convento de São Francisco）、サンティアゴ教会（Igreja de Santiago）、ペ・ダ・クルス教会（Igreja do Pé da Cruz）などは訪れる価値があります。

ページャの町の探検に役立てるため、現地の観光協会はヘッドフォンを利用して自分のペースで歩く音声ガイド付きツアー、「Sounds of Time」のサービスを始めました。理想的な旅行の時期はオヴィページャの農業祭が開かれる3月ですが、この地方の文化、歴史を知る絶好のチャンスです。